

働くということ ～時代の変化に合わせてどう働くか～

8月29日(火)～30日(水)の2日間、本校2年生24名を対象にインターンシップを実施しました。受け入れてくださった事業所の皆様に、改めてお礼申し上げます。

インターンシップは、現場でしか学べない実務的な知識や技能を学ぶ機会として、職種の理解と将来の職業選択に役立てるために実施していますが、その職業の在り方がこれから大きく変わろうとしています。

「今ある49%の仕事がAIに取って代わられる可能性がある」というイギリス・オックスフォード大学の報告から8年あまりが経過しましたが、AIの進化により代替されるとされる職業は、事務員や店員、銀行員（キャッシュレス化の進行）、運転手（自動運転の普及）、更には建築作業員や監督（画像認識技術やドローンの活用）など多岐にわたっています。こうした状況は「AIが仕事を奪う」などの衝撃的な言葉とともに報じられることが多いのですが、これからの時代を生きる生徒たちはどう対応するべきなのでしょう。

5年に一度実施される国勢調査で使われる職業分類をもとに調査・発表された研究レポート「国勢調査から消えた『平成の職業』」では“平成とともに消えた（平成2(1991)年の国勢調査に記載があるが、平成27(2015)年の国勢調査では削除された。一説には1,200人を下回ると対象となるようです）24の「職業」”が挙げられており、次の三つに分類されるそうです。

1 技術が一般化され必要とされなくなった「職業」（速記者やタイピストなど）

和文タイピストは文書作成に加え、印刷の版下制作を担ったことから印刷会社の業績を左右するとも言われましたが、ワープロの登場で容易に文書が作成できるようになり減少しました。

2 流行が移り伝統芸能化された「職業」（あやつり人形使いや腹話術師、曲芸師など）

現在でも活躍する方はいますが、流行の変化や娯楽の多様化により、芸能者が減って伝統芸能化されたことで消えた「職業」となりました。

3 技術革新や時代背景によって必要とされる場が激減した「職業」（集金人や場立人など）

場立人とは、証券取引所で専用の手サインを出して取引する人で、コンピューターシステム化が進んで立会場で取引がなくなり、消滅しました。

消えていく職業に共通するのは、人にしか担えなかった技能などが、技術革新により人以外ができるようになったということです。日本が抱える課題の一つ、人手不足の解消という点から見ると、むしろ歓迎すべき状況であるとも言えます。

AIは過去の知見を学び、活用できます。しかし、改善や臨機応変な対応、共感、想像力によって新しいものを創り出すことはまだ苦手です。AIが進化し人間の脳と同レベルに到達する時点（＝シンギュラリティ）は2040年前後とされていますから、AIが意思を持って動き出すには時間がかかりそうです。

では、AIが発展する時代を生きていく上で必要なことは何でしょうか。

一つには、効率化はAIに任せ、人間は創造性や共感といった、人間にしか担えない分野に特化することで、共存していくことです。生産性やコストなどの効率を追求しすぎると、革新的な技術や発想による新たな価値は生まれにくくなります。今私たちが恩恵を受けている便利さも、非効率、試行錯誤から生まれたものが多くあります。人間にしかできない付加価値を持った仕事（19世紀に写真が登場したときも画家の仕事がなくなるといった騒ぎがありましたが、描写の正確性よりも人々の美的感覚に直接訴える作風に変化して生き残りました）を担えるよう、時代に合った資質や能力を高める必要があります。

二つには「考える力」を鍛えることです。話題となっているChatGPTなどの生成AIは、便利である反面、不正確な情報を返すことや情報漏洩の恐れが指摘されています。不正確な情報を見抜く知識やより正確な情報を引き出すための指示を作成する技能、そして倫理的な正誤の判断などが人間に求められます。

学校が担ってきた知識・技能の伝達の仕組みも今後は変化していくかもしれませんが、身に付けるべき知識や技能、思考力等の根本は大きくは変わらないでしょう。時代の進展に合わせて社会を生きていく力、地域や国家の担い手として必要な力を育成していくことを本校の重要な使命とし、引き続き取り組んでまいります。